【資料１】
＜西山手＞

令和6年度　西山手イチオシ活動について（結果報告）

西山手高齢者生活支援センター
令和７年1月28日時点

【イチオシ活動の概要】
令和４年度に地域でも繋がりのない男性に対してアプローチをしたがあまりうまくいかず課題が残っていた。また昨年度の活動を通して高齢男性が地域から孤立しているのではないかと感じることが多くあった。男性のニーズを満たしながら、社会参加することで孤立・孤独感を解消していく。

【キッカケ】
・令和５年５月の大原のマルシェ、11 月の西山手の秋のつながるフェスタで男性参加者が少なかった。
・さわやか教室や地域交流スペース（三条えがおの集い）でも男性参加者が極めて少ない。

【現況】
男性はグループ作りや集うことが苦手な傾向にあるため、積極的な社会参加に繋がらない。

【課題と目標】
課題：男性が社会参加できるような居場所がない
目標：社会参加を通して仲間を作り、孤立・孤独感の解消ができる

【対象者】
高齢男性
（概ね６５歳以上）

【取り組み体制】
「介護予防」をあえて外して「オシャレでカッコいい！楽しい！」を前面に出した男性に興味を持ってもらえそうなテーマを企画する。単に学ぶだけでなくその後に役割を持って活動できる場を用意する。
講師は外部に依頼しセンター内事業担当者や生活コーディネーター等が協働で活動する。

【具体的な取り組み】
「男のコーヒーアカデミー」全３回×２クール
→コーヒーの知識や淹れ方の技術を学ぶ。
→学んだ淹れ方の技術を地域のつどい場や認知症カフェなどで披露する。

【資料１】
＜西山手＞

【スケジュール】
５月　広報あしや・掲示板にてアナウンス（チラシ作成）
　　参加者受付
　　１クール目　全３回開催（5/24、31、6/7）
６月　むぎばたけ（6/21）にてコーヒーハンドドリップの披露
７月　２クール目　全３回開催（7/12、19、26）
　　※１クール目の参加者数名、お手伝いとして参加
８月　むぎはたけ（8/6）にてコーヒーハンドドリップの披露
11 月　参加者同窓会

【取組内容】
・３名ほどの少人数のグループで作業をすることで仲間意識、仲間作りができる。
・毎回講座の目的を伝え、アンケートを取ることで中心となって地域に参加できそうな人材を発掘する。
・講座のみで終わるのではなく、地域でコーヒーハンドドリップを披露できる活動の場を設定する。

【取組結果】
１クール目（5/24、5/31、6/7）
　参加者数 10 名（60 代４名、70 代６名）
２クール目（7/12、7/19、7/26）
　参加者数７名（60 代１名、70 代４名、80 代２名）＋サポーター役１回目の参加者３名
・ターゲットにしていた 60 代、70 代の男性の参加者が多く、うち４名の参加者が今後も継続して活動したいと希望。
・むぎばたけ２回、自治会のイベント１回、あしやの会２回の計５回、４名のうちの希望者が地域でコーヒーハンドドリップを披露し、参加者へ挽きたてコーヒーを提供した。

【課題】
・メンバーを増やし自主的に継続して活動できる仕組み作り。
・男性が社会参加できるような居場所を増やしていく。

令和6年度 東山手 イチオシ活動報告

昨年度から見守りの仕組みつくりや孤立化予防を目指し、マンション単位、小地域へ働きかけをおこない　住民同士がつながるきっかけ作りをおこなってきた。働きかけをおこなったマンション内での自主活動グループが生まれ、住民が集うきっかけ作りはできたが目標であった見守りの仕組みつくり（互助組織）まではできなかった。今年度も引き続きこの活動にとりくみ3つの目標をたてた。

①既存グループには自分たちの活動が孤立化予防につながっていることを意識してもらい自分たちで支え合う仕組みを作る。
②新たなマンションや小地域での活動を増やす。
③定期巡回訪問の継続

●具体的な活動　～既存グループへの働きかけ～

マンション理事会の承認を得て『シニアクラブ』として発足。登録者16名。
毎週水曜日にマンション集会室にて「いきいき100歳体操」を実施
3ヶ月に1回、包括スタッフによるミニ講話、体操、相談会実施
4月～12月まで休むことなく常時5～6名が集い　参加人数延べ216名

●結果

『シニアクラブ』に参加するまで、全く繋がりがなく挨拶もしなかった住民が活動をきっかけに、一緒に食事をしたり、出かけたりするようになった。会の参加が安否確認の場となり自然な見守り体制ができた。
また、もっと多くの人に活動を知ってもらいたいとの声もあがりシニアクラブの主催で出前講座や介護相談会を開き、自分たちの活動を広げていきたいとの思いをもつようになり互助意識の醸成につながった。

●課題

今回のようにマンション理事会に承認をえても活動場所に苦言を呈する住民もおり、住民の理解を得て周知していくことが難しい。
マンション内の集会室を利用することで、参加しやすい利点はあるがマンション理事会に働きかけをおこない、活動を広げていくのに時間がかかる。

【資料１】
＜精道＞

令和6年度　イチオシ活動について

精道高齢者生活支援センター
令和７年１月時点

イチオシ活動の概要

自主グループが発足するも様々な課題があり継続しない。まず地域住民と既存の社会資源を繋ぎ、自主的な活動が行えるよう働きかける。

● きっかけ

センターの職員が地域密着型デイサービスの運営推進会議に参加したところ･･･

参加者の地域住民や民生委員から
「このデイサービスの空き時間をぜひ活用できないか」

デイサービスから
「地域に貢献したいけど、どうしたら良いか悩んでいた」

● 現況(背景)・課題

場所問題やリーダー不在により自主グループが存続できなかった。また費用負担が理由で存続危機に陥っているグループも出てきた。

自主グループの継続は難しい

● 目標

圏域の介護予防レベルを向上するために、地域住民が地域にある社会資源を活用できる

● 取り組み体制

1. アラカルト方式のさわやか教室
2. 地域住民と社会資源をつなぐ

● 具体的な取り組み・スケジュール

1. アラカルト方式のさわやか教室を実施(4.5.6 月)
4種類(3B体操・ズンバ・健康体操・転倒予防教室)を3回ずつ実施
各教室へは若干繋がったものの、各教室での増員とまでには至らなかった。

2. 地域住民と社会資源をつなぐ

(1)デイサービスの民生委員見学・体験会の実施(介護保険の啓発を含む)

①ノブレス(4/13)

②リハビリデイサービススマイル(5/19)
民生委員が社会資源を知ったことで住民に紹介しやすくなった
早期の取り組みによる介護予防の必要性の理解が深まった
住民ボランティアの場になるといった発見にも繋がった

①

②

(2)地域の社会資源を使って、民生委員・ケアマネジャー・包括との交流会実施

①精道小学校区　(Les芦屋・11/15)
身近にある社会資源で交流会を実施することで、民生委員の施設に対する知識が増え、施設からも“また一緒にやりましょう”の声もあり、地域の活用できる場所としての再認識にも繋がった。

②宮川小学校区(「うちぶん」打出教育文化センター・1/24)
「うちぶん」の紹介・災害時の個別避難計画ついて、などを予定。

（3）個別ニーズからのマッチング

①テニス：認知症によりテニスチームから外されてしまったことで気落ちしていたケースの相談が入り、ボランティアと繋がってテニスができる仲間ができたことで、その後本人がいきいきしだした。

②麻　雀：94 歳の女性の希望により町の活動リーダーに声をかけマンション内に麻雀するグループが結成された、本人の楽しみとなった。

③編み物：センターで関わっている一般ケースと事業対象者の共通の趣味によりマッチングし、編み物の深い話ができる人と繋がることができた。

● **評価・分析（課題）**

・地域にある体操教室に繋がることを期待しアラカルト方式を実施したが、結局わずかしか繋がらなかったことから、有効的な手段ではなかったと考えられる。今まで様々な方法でさわやか教室を実施してきたが、やはり身近な場所で顔の見える教室を通年実施することが効果的であることが分かった。

・個別ニーズからのマッチングにより、パワーレスの高齢者が人や社会資源と繋がることでパワーアップできたことから、繋がり居場所や活動の場ができることで、住民や地域の介護予防力底上げに繋がるのではないかと考えられる。

● **次年度計画**

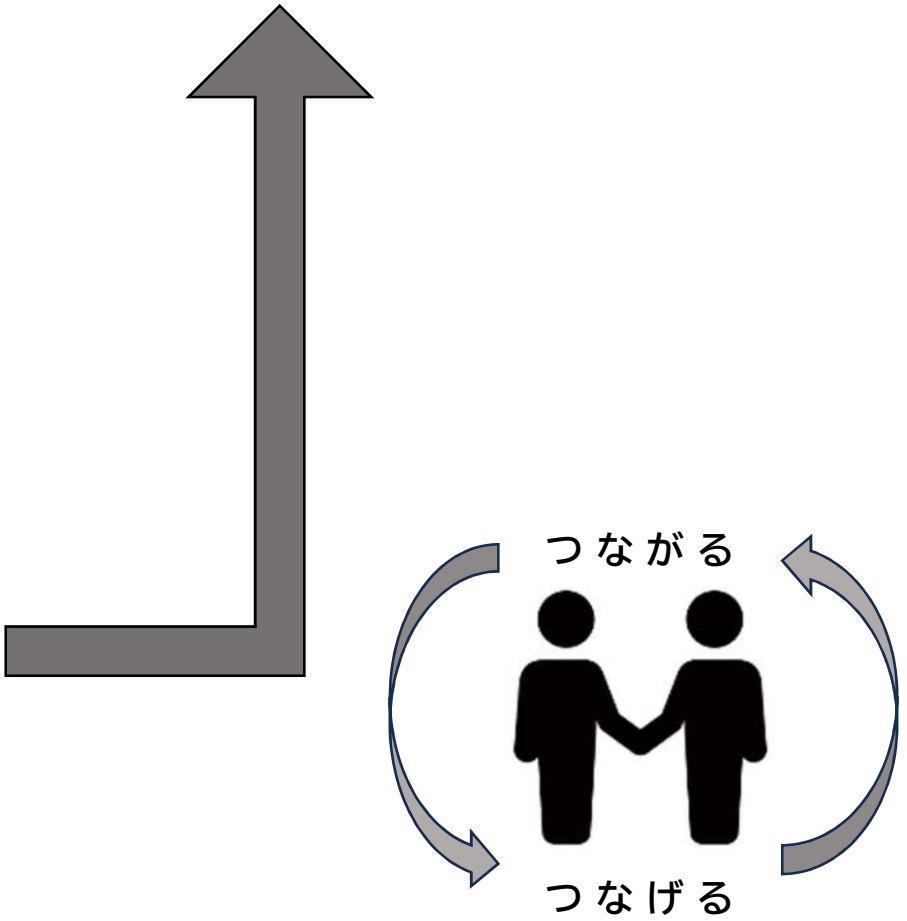
住民の個別ニーズと地域ニーズのマッチング

・既存の社会資源とのマッチング

・居場所づくり、活動の場づくり

・住民と地域との相互作用を図り、パワーアップを目指す

・生活支援コーディネーターなど関係機関との連携



令和６年度　イチオシ活動について

活動概要

芦屋市全域において、認知症の当事者、家族が集まる場所はあるが、認知症に問わず介護を行っている介護者が集まり話す場がない。
とくに潮見圏域では高齢化率が高く、介護に追われ介護者が孤立しているケースが多い。虐待予防の観点からも介護者が交流をもつ場が必要。

目標・現況

・「気持ちを吐き出せる場となり、介護者の心の負担を軽減できる」場を目指す
・定期開催を行う
・R5 年度はプレ開催で 2 回、今年度は 9 月に 1 回目を開催

課題

・9 月開催の参加者は 1 名
・参加者の思いと会の目標は同じだったが、周知や参加者募集の方法には検討が必要

具体的な取り組み

・開催日を R7.2/1（土）へ変更
・居宅支援事業所へのチラシ配布に加え、主任 CM 交流会にてアナウンス
・忙しい介護者が普段からよく利用する病院・薬局・スーパーへ配架を依頼
・地区福祉委員会等の会議体でアナウンス

高齢者生活支援センターが開催･参加する会議のリデザイン

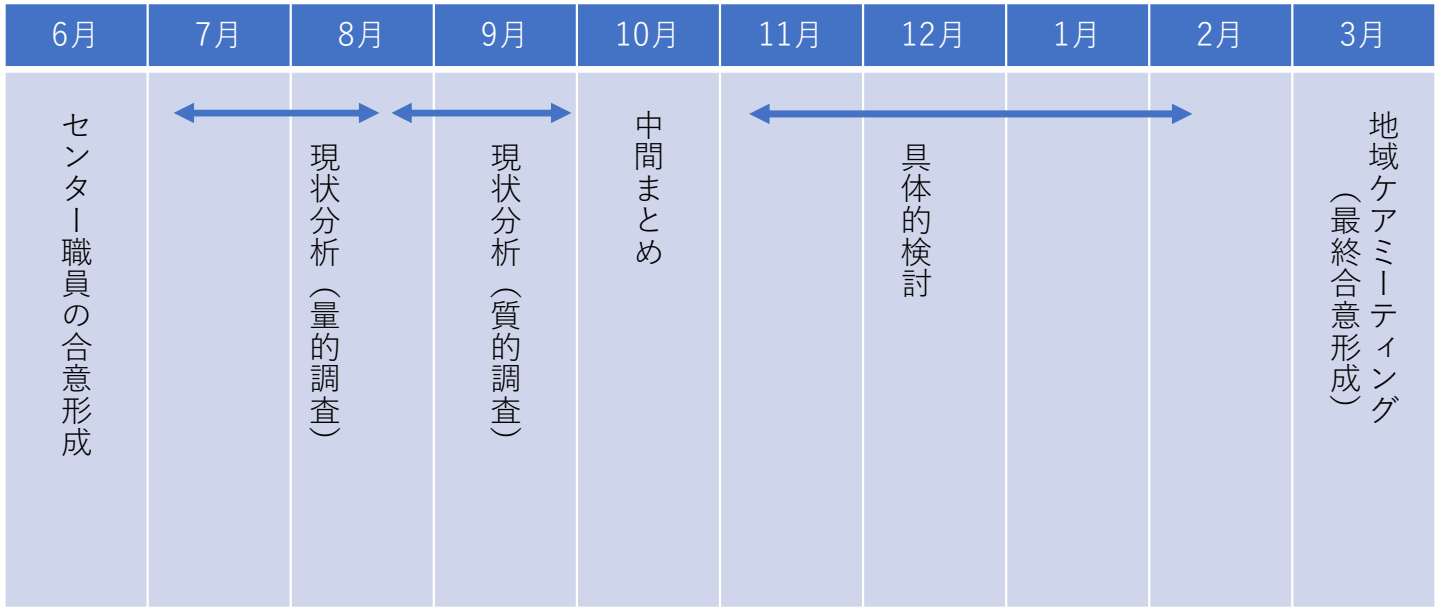
2024年4月　精道高齢者生活支援センター･基幹的業務担当

- （依然として）高齢者生活支援センターの相談対応件数は増加傾向にあり、職員、特に３職種の業務過多は著しく、職員のバーンアウト、離職が懸念されている。
- 「ネットワーク構築機能」を発揮する具体的な場としては、「会議」以外には想定されないものの、会議開催までの準備を含めた「会議負担」が増大しているという声が多い。
- 従来、ルーティンに開催してきた会議の「意義」や「期待する役割」などを洗い出し、業務の重点化・効率化に向けて、高齢者生活支援センターが開催・参加する会議のリデザイン（再構築）をはかる。

リデザインが考えられる会議(例)

- 個別ケアミーティング（地域ケア個別会議）
- 地域ケアミーティング（地域ケア推進会議）
- 支援者会議
- 高齢者生活支援センター連絡会
- 包括支援センター連絡会（包連会）
- 専門部会（社会福祉士部会、保健師部会、主任介護支援専門員部会）
- 圏域あしもり会

リデザイン展開プロセスイメージ



高齢者生活支援センターが開催･参加する会議のリデザインに向けた取組

(1)包括職員が集まる会議等でのヒアリング

包連会や職種別専門部会（社会福祉士部会、保健師部会、主任ケアマネジャー部会）等において、現場職員の業務負担、特に会議の負担感についてヒアリングを適宜実施。

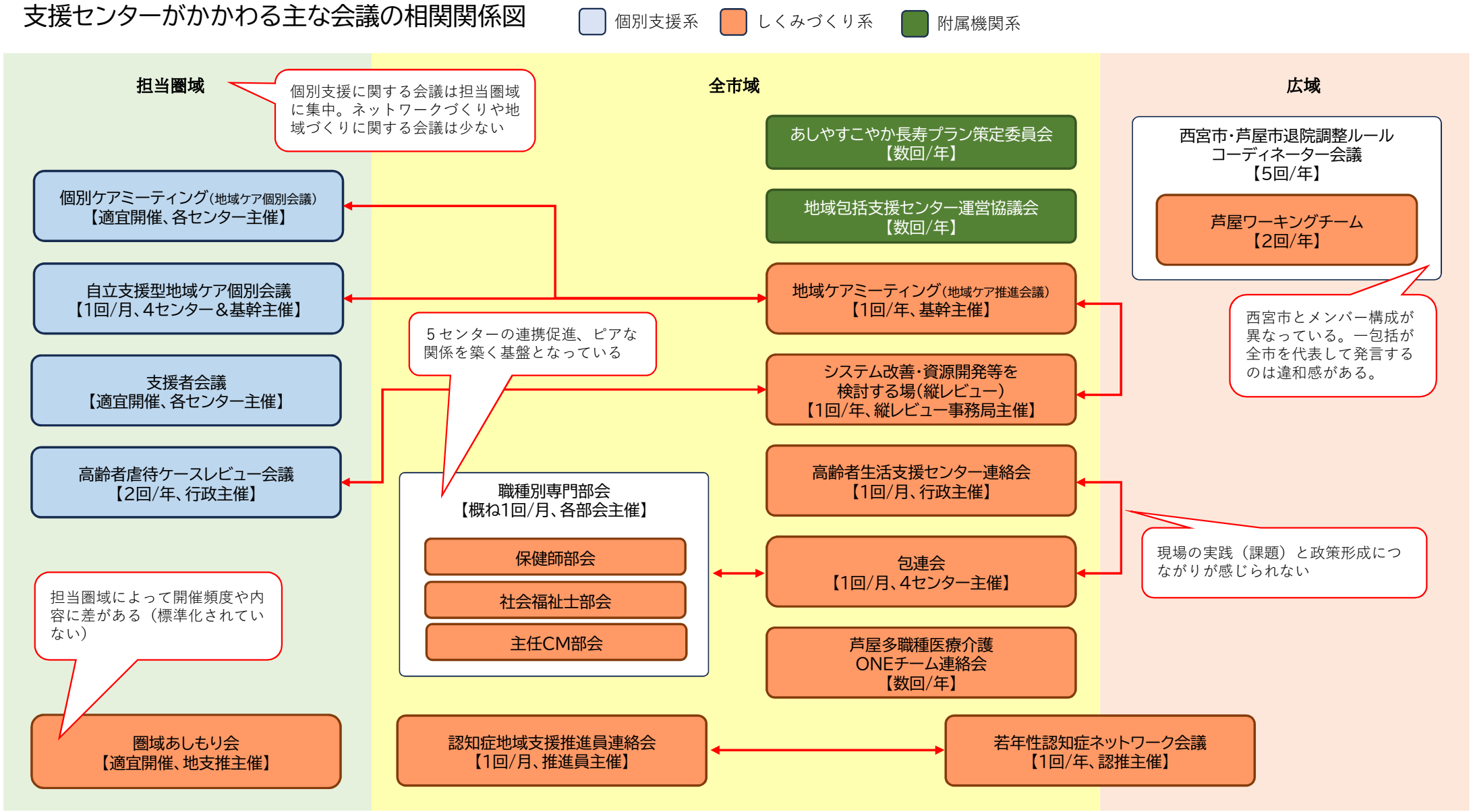
(2)既存の会議の分析

包連会が開催・参加する会議について、会議の機能、会議間の関係性等を基幹的業務担当で分析。「負担感」ではなく、「成果」や「生産性」に焦点を当てて分析し可視化。（別紙参照）

(3)Scrap & Build に向けた意見抽出とまとめ

包括が負担感を感じている会議等について意見を集約し、提言に向けてのまとめを実施中（現在進行中）。

支援センターがかかわる主な会議の相関関係図



支援センターがかかわる主な会議機能整理表

「地域ケア会議の５つの機能」で分析

「ピアグループSVの機能」で分析

会議名	個別課題解決機能	ネットワーク構築機能	地域課題発見機能	地域づくり・資源開発機能	政策形成機能	教育的機能	支持的機能
①個別ケアミーティング（地域ケア個別会議）	○	◎		△			
②自立支援型地域ケア個別会議	○		△			◎	
③支援者会議	◎	○				△	
④高齢者虐待ケースレビュー会議			○				
⑤システム改善・資源開発等を検討する場（縦レビュー）			◎	○			
⑥地域ケアミーティング（地域ケア推進会議）			◎	○			
⑦高齢者生活支援センター連絡会			○				
⑧包連会			○				△
⑨職種別専門部会：保健師部会			○	△			◎
⑩職種別専門部会：社会福祉士部会			○	△			◎
⑪職種別専門部会：主任ケアマネジャー部会			○	△			◎
⑫認知症地域支援推進員連絡会		◎	○	△			
⑬若年性認知症ネットワーク会議	△		◎	○			
⑭芦屋多職種医療介護ONEチーム連絡会			◎	△		○	
⑮西宮市・芦屋市退院調整ルールコーディネーター会議		◎		○			
⑯西宮市・芦屋市退院調整ルールコーディネーター会議・芦屋ワーキングチーム		◎		○			
⑰圏域あしもり会			○	△			
⑱地域包括支援センター運営協議会					○		
⑲あしやすこやか長寿プラン21策定委員会					◎		

「会議の成果」よりも、「会議開催前後の負担感」が強い

課題抽出機能を有する会議は多いが、地域づくり、資源開発や政策形成へのつながりが弱い

包括同士のピアな関係によるつながりがもたらす効果

考察とまとめ　～今後の取組みに向けて～

1. 職員の生産性の向上と効率化に向けた研究と投資

2. 会議開催目的の明確化

3. 会議評価基準の策定

4. 業務の重点化（取捨選択）に関する合意形成